

浄土宗祖法然上人（以下すべての尊称略）が浄土教の根本経典として『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』を浄土三部経として選定され、また、所依の経論とされた。このことは、その門下門流においても同様に継承されている。それは、法然の門流に位置する時宗教団の宗祖一遍（1239～1289）においても同様のことであり、特に『阿弥陀経』を重要視している。

さて、その時宗教団において近世時宗教学を論じる際に取り上げられる宗学書としては、覚阿玄秀（1661～1703）『時宗統要篇』（1702年成立）及び其阿如海（～1749）『時宗要義集』（1713年成立）等があげられる。

まず、覚阿玄秀『時宗統要篇』では、三部経の関係について『無量寿経』を序分、『観無量寿経』を正宗分、『阿弥陀経』を流通分にあたりとし、三経一連して弥陀経と号しており、当流（時宗）の意であると述べている。また、この覚阿玄秀『時宗統要篇』の特色は、一遍の偈頌に三部経をそれぞれ配当し論述している点である。

続いて其阿如海『時宗要義集』には、「宗義開出問答章」において時衆教学において『阿弥陀経』を正依の経典としてあげている。この『時宗要義集』においては、その理由として以下の三をあげて述べている。それは、「一、宗祖有縁の経なるが故に。二、相伝の経なるが故に。三、領解の経なるが故に。」であると述べ、また、時宗を立てる意として『阿弥陀経』「臨命終時」の四字であると、これは、釈尊一代を撰することからであるとしている。それはこの四字が弥陀の本願大悲であり、釈尊出世の本懐そのものが念仏一行を説くものであることからであるとしている。

さらに、其阿如海は、「浄土三部経」の関係についても述べており、『無量寿経』を序分、『観無量寿経』を正宗分、『阿弥陀経』を流通分にあたりとそれぞれを位置づけている。これらの説示内容について其阿如海は、宗祖である一遍の私意ではなく、あくまでも熊野相承つまり本地垂迹説でいうところの阿弥陀仏から直接継承されたものであることと述べている。

つまり、この二種の著作からではあるが近世時宗教団では、浄土三部経特に『阿弥陀経』の説示を重要視しつつ宗義の根幹を成す著作のない一遍教学を基底とするために一遍教学を浄土三部経との関連付けさせながら近世時宗教学を構築していったのではなかろうか。

今回は、この点について「時衆教学における仏説について」と題し、一遍の三部経観を端緒にその教学が如何に後世特に近世時宗教学に継承され、構築されたかを考察したい。

（中世には時衆を用い近世以降は時宗を用いることとする。ただし、近世時宗教学と時代設定を限定する場合以外は、時衆教学と示すこととする。）

キーワード

浄土三部経 時衆 一遍